

---

# 猛暑

篠義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猛暑

### 【コード】

N0076Q

### 【作者名】

篠義

### 【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

「暑い、暑い、暑い。」

「ガリガリ君でも食うとけっつ。」

「もう、ええやろ？ 花月。なあ、もう、勘弁して。俺が悪かったから……もう言わへんからっつ。」

「まだ、あかん。これも体調管理の一環や。」

本日は、今シーズンの最高気温を記録するだろうという晴天の日。洗濯は、さっさと乾くし、空には雲ひとつない。どっかのあほが、「心頭滅却すれば火もまた涼し」と、あほなことを言っつて、クーラーを切った。新聞を読んでなかったという敗因はあるのだが、俺の提案に飛びついたのは、水都のほうだ。

「がまん大会をして負けたもんが、飲料水の買出しに行く。」

「……ふふふふ……俺は勝てる自信がある。やっつたらうやないか。」

「ほんなら、今からな。」

「おう。」

と、ぽちつと、クーラーの停止ボタンを水都は切った。それが昼前のことだ。ただいま、午後三時。窓を全開にしても風がないから、ただ暑いだけという状態で、ごろごろと廊下に転がっていた水都は、

すでに泣きを入れている。こいつの場合、普段から職場で、たくさんコンピューターが放出する熱を下げるために、かなり低い温度に設定された場所で働いている。人間よりも、コンピューターの熱暴走を阻止するための温度設定だから、そこは完全に冬の世界だ。

対して、俺は公務員。税金を支払ってくれる皆さんからのご要望により、温度設定28度という暑い世界で暮らしている。はっきり言って、暑い。クールビズでも暑いという職場だ。勝負なんて見えているのに、それに気付かないのが、俺の嫁だ。

まあ、勝敗なんて、どうでもええのだ。要するに、その寒い職場にいる俺の嫁の体調を良くしようとすると、半日くらい常温で過ごさせて汗をかかせるほうがいいから、その提案をした。飲料水の買出しなんて、ひとりでは無理な話で、ふたりに行かなければ、箱ものは運べない。

うだうだと融けている俺の嫁は財布を手にして、ふらふらと立ち上がった。

「・・・俺・・・ちょっと散歩してくる・・・」

「おう、ほんなら、おまえの負けな？」

「もう、なんでもええわ。ビールと炭酸水買ってくるから、クーラーつけて。」

「今はやめといたほうがええと思うけどな。」

「あほ、こんなところにおるくらいやったら、スーパーで涼むほうがええ。」



「いやいや、これぐらいしたら、ええ感じやる。」

「冗談やない、と、俺の嫁はクーラーのリモコンを探しているが、どっこい、そんなわかる場所に置いてあるわけがない。あっちこっちの引き出しを開けているが、そんなところに隠しているわけがない。」

「二時間忘れさせたらどうか？」

「風呂場は痛い。」

「けど、涼しいのは風呂場やで？」

「くだらだらと汗を流しているところを見ると、そろそろ茹っているようだ。なんだか、ちよつとぼおーつとしているので、やばい。あんまり苛めると熱中症になりそうだから、台所の鍋からリモコンを出した。」

「ほら、ここにあって？」

「うちのクーラーは、各部屋に設置しているが、どれも同じリモコンを使用している。取り上げようと手を伸ばして来るものと身構えたら、抱きつかれた。おや？ と首を傾げたら、嫁の太腿が俺の足の上に割り込んできて、ゆらゆらと動かされる。珍しいお誘いやなあーと、俺が嫁の背中に手を回した途端に、リモコンを取り上げられた。」

「なんよ？」

「・・・おまえなんか、ひとりで灼熱地獄で苦しめつつ。」

リモコンを手にして、スタスタと、自分の部屋に戻るうとするので、慌てて追い駆けた。お互いのプライベートというものがあるから、と、同居当初に、鍵がかかる部屋にしたのだ。

「つれないこと言いなや、水都。」

「うるさいわっつ。もう暑いのはええんじやっつ。」

「せやから水風呂へやな。」

「あの狭いところへ二人で入ったら窒息する。」

「……んー……とりあえず、すつきりさせたらうっと思ったんやけど。まあええか。」

「やらへんっつ。」

「俺に火をつけたのは、お・ま・え。」

「あらあー緊急措置じゃっつ。勝手に自家発電しとけっつ。」

どんっつと突き飛ばされて、部屋から強引に追い出された。クーラーをつけた音がするので、やれやれと俺は風呂場へ移動する。別に、リモコンは、あと二個あるから、あれがなくても問題はない。

「……天岩戸かい?……」

ガチャリと鍵をかけていたが、あれはあんまり意味がない。女神様なら、いざ知らず、ただの人間の俺の嫁は、生理現象というもの

があつて、それにはトイレが必要だからだ。暑い、暑いと麦茶を飲んでいたので、そのうち出てくるだろう。そこを捕獲すればよいことだ。

・・・あー、やる前に、飲料水の買出しだけ付き合わせなあかな。  
・・・

それさえ済ませたら、明日も休みなので、のんびり朝寝をしようと考えている。連休ではあったのだが、暑くて、どこかへ出かけようという気分にはならなかった。だから、二人して、バカバカしい我慢大会などやっていたりする。水風呂で、すっきりした俺は居間に戻った。

かちやり

嫁の部屋の扉が開いたので、えら早やな、と、思ったら、水都が、ちよいちよいと手を動かして呼んでいる。

「なんよ？」

「涼みにきやへんか？」

「それは、お誘いなん？」

「いや単なる涼み。買出し行かなあかんから、そっちは夜に。」

「買出しは、二人で行くさかいな。」

「そうか、おおきに。せやけど使い物にならへんのは問題やから、そっちは夜。」



「そっちて何よ？」

「そっちはそっちじゃっつ。」

なんで、今更、そんな単語で照れるのか、かなり疑問だが、まあ、そっちのところ可愛いといえば可愛い。ふたりして、夕方までクーラーの部屋で昼寝をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0076q/>

---

猛暑

2011年1月16日07時55分発行